

目次

理工学部		目次	1	
理工学部	機械工学科	三林 雅彦	材料強度学研究室	4
		十朱 寧	環境エネルギー変換システム研究室	5
		感本 広文	機械力学研究室	6
		後藤 昭弘	先端加工研究室	7
		野崎 孝志	ヴィークル工学研究室	8
		吉見 直人	材料表面工学研究室	9
		飛田 和輝	知能メカトロニクス研究室	10
		牧野 育代	流体科学研究室	11
		黒瀬 隆	構造力学研究室	12
		佐藤 彰	エア・モビリティ研究室	13
理工学部	電気電子工学科	野内 忠則	次世代エンジン研究室	14
		鹿内 佳人	ロボット工学研究室	15
		鈴木 弘人	無人機航空システム工学研究室	16
		美馬 一博	生活支援スマートシステム研究室	18
		小澤 哲夫	化合物半導体研究室	19
		土肥 稔	蓄電装置研究室	20
		石田 隆弘	高電圧工学研究室	21
		村上 裕二	センサ工学研究室	22
		服部 知美	システムコントロール研究室	23
		本井 幸介	生体情報計測研究室	24
理工学部	物質生命科学科	本良 瑞樹	ワイヤレス情報通信研究室	25
		中田 篤史	電力変換装置研究室	26
		武岡 成人	音響研究室	27
		青山 真大	電動機器システム研究室	28
		Mars Kamel	イメージング集積回路・システム研究室	29
		齋藤 明広	応用微生物学研究室	31
		桐原 正之	有機化学・医薬品化学研究室	32
		笠谷 祐史	X線構造物性研究室	33
		山崎 誠志	界面物理化学研究室	34
		宮地 竜郎	食品安全学研究室	35
理工学部	建築学科	南齋 勉	非平衡界面化学研究室	36
		吉川 尚子	食品機能化学研究室	37
		小土橋 陽平	機能性高分子研究室	38
		高部 稚子	ストレス反応制御研究室	39
		鎌田 昂	天然物化学研究室	40
		佃 諭志	ナノ材料研究室	41
		脇川 祐介	分子物理化学研究室	42
		崔 琥	防災構造工学研究室	44
		脇坂 圭一	建築計画・デザイン研究室	45
		渡辺 英義	耐震構造研究室	46
理工学部	建築学科	長尾 亜子	建築意匠研究室	47
		石川 春乃	建築環境(温熱)研究室	48
		田井 幹夫	設計・意匠(デザイン)研究室	49
		鍋島 佑基	建築環境(設備)研究室	50
		林 英昭	建築史研究室	51
		E RIDENGAOQIER	建築材料・生産研究室	52

理工学部	土木工学科	中澤 博志	地盤防災工学研究室	54	
		松本 健作	水理研究室	55	
		西田 孝弘	社会インフラ材料学研究室	56	
		富永 知徳	構造デザイン研究室	57	
		Mahapatra Kedarnath			
			地球環境・リモートセンシング研究室	58	
		松本 美紀	建設・防災マネジメント研究室	59	
		居波 智也	海岸工学・再生可能エネルギー研究室	60	
		鈴木 一史	モビリティデザイン研究室	61	
		芦澤 恵太	応用・計算調和解析研究室	63	
情報学部	コンピュータシステム学科	國持 良行	計算機科学研究室	64	
		足立 智子	応用数理・暗号理論研究室	65	
		渡邊 志	感性情報処理研究室	66	
		富樫 敦	データサイエンス・人工知能研究室	67	
		大石 和臣	情報・物理セキュリティ研究室	68	
		高野 敏明	適応システム研究室	69	
		山岸 祐己	サービス情報学研究室	70	
		四宮 友貴	画像認識アルゴリズム研究室	71	
		河野 郁也	並列アクセラレーション研究室	72	
		范 自然	応用デザイン研究室	73	
		情報デザイン学科	田村 和広	ゲーム・強化学習研究室	74
			小栗 勝也	マスコミ研究室	76
			富田 寿人	スポーツ科学研究室	77
			大相 弘順	遺伝情報／人工生命研究室	78
			友次 克子	言語学研究室	79
	林 章浩		マネジメント・メソッド研究室	80	
	谷口 ジョイ		社会言語学研究室	81	
	本多 明生		心理学研究室	82	
	兼子 一		社会学・社会調査研究室	83	
	松田 崇		コミュニケーションデザイン研究室	84	
	伊藤 明倫		先端アート研究室	85	
	渡邊 言也		感情神経科学研究室	86	
	白田 泰如		会話コミュニケーション研究室	87	
	津田 裕之		環境認知科学研究室	88	
	教育開発センター		Adam Brian Jenkins		90
	大学院 理工学研究科 システム工学専攻	高橋 桂子	地球環境インフォマティクス研究室	92	
		峯田 克彦	環境ゲノミクス研究室	93	
		喜多 隆介	超伝導工学研究室	94	
		産学交流		96	
		産学コラボネット		97	
研究会			98		
ふくろい産業イノベーションセンター			100		
藤枝イノベーション・commons			101		
取材対応窓口			102		
ホームページ一覧			103		
産学官連携のご案内					



情報学部

情報デザイン学科



教授
小栗 勝也

OGURI Katsuya

- 学歴 慶應義塾大学 法学部 政治学科 卒業(1987)
慶應義塾大学大学院 法学研究科 政治学専攻 修士課程 修了(1989)
慶應義塾大学大学院 法学研究科 政治学専攻 博士課程 単位取得(1992)
- 学位 法学修士(慶應義塾大学)
- 略歴 静岡理工科大学 理工学部 講師(1992)
静岡理工科大学 理工学部 准教授(2007)
静岡理工科大学 情報学部 教授(2017～)
慶應義塾大学 法学部・理工学部・通信教育部 非常勤講師(1993～2004の間に断続的に担当)
- 学会 日本政治学会／日本選挙学会／日本法政学会／慶應法学会
- 専門 近現代日本政治思想史／現代マスコミ論
- 研究 明治末期から昭和初期までの日本政治思想史／現代日本のマスコミ論
- URL <https://researchmap.jp/read0173608>



研究概要

袋井地域最古の小学校・用行義塾の研究

明治5年6月に久津部村(現・袋井市)の住民が設立した「用行義塾」は、中東遠地域で最古の小学校である。『袋井市史』で取り上げられた程度の内容しか知られていなかった用行義塾に関して、近年、袋井東小学校所蔵の非公刊文書や他の文書・石碑等を小栗が調査したことによって幾つかの新発見があった。例えば、『市史』が示唆するような福沢諭吉『学問のすすめ』の影響で作られた訳ではないこと、小学校としてだけでなく英語塾として2つ目の用行義塾が存在していたこと、また創設発起人9名の実名が判明し、その中でも久津部村の庄屋であった足立家の人々が中心であったこと等が分かってきた。この時の足立一族の中には、福沢諭吉の内弟子で慶應義塾第3代塾長に位置付けられている足立寛(のち陸軍軍医総監)の実兄も含まれており、その線から福沢との関連性があった可能性も考えられる。現在の小栗は、このような地元地域に関する歴史的情報の発掘活動も行っている。用行義塾に関する論文も多数執筆している。



市教育委員会による案内板



新発見の糸口になった戸倉新資料

連携可能内容

「マスコミ研究室」というのは、ゼミで学生と共に行っている研究分野がマスコミであるためです。小栗個人の専門分野は歴史であるが、当時の新聞雑誌、手紙や古文書などの文書情報を扱っている点で、現在のマスコミ報道を調べることに手法は同じです。その手法を用いて、地域の情報がマスメディアでどのように扱われているか、そのトレンドはどのように変化しているかを分析することで効果的な地域の情報発信に関する提言を行うことも可能です。



教授
富田 寿人

TOMITA Hisato

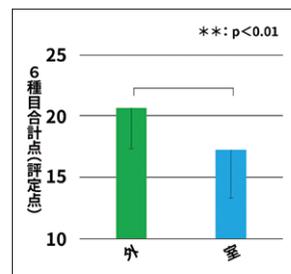
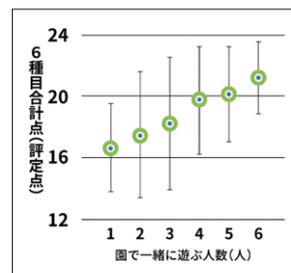
- 学歴 早稲田大学 教育学部 教育学科 卒業(1982)
順天堂大学大学院 体育学研究科 修士課程 修了(1985)
順天堂大学 研究生 修了(1987)
- 学位 体育学修士(順天堂大学)
- 略歴 早稲田大学 教育学部 助手(1987)
静岡理工科大学 理工学部 講師(1991)
静岡理工科大学 理工学部 助教授(1997)
静岡理工科大学 総合情報学部 准教授(2008)
静岡理工科大学 情報学部 教授(2013～)
- 学会 日本体育学会／日本体力医学会／運動生理学会／American College of Sports Medicine／
日本ウォーキング学会
- 専門 運動生理学／体力学
- 研究 幼児の運動習慣と体力の関係／健康づくりにおける運動の効果／人のパワー出力について
- URL <https://researchmap.jp/read0173606>



研究概要

幼児の運動習慣と体力

社会環境や生活様式の変化に伴い幼児を取り巻く環境は変化している。その中で、幼児の体力は、運動遊びの時間に依存していると考えられる。本研究の目的は、静岡県内にある幼稚園・保育園・幼保園の計9園に所属する年長および年中の幼児を対象に体力測定とアンケート調査を行い、子どもたちの体力に関する要因を明らかにすることであった。被験者は、静岡県内の9園の幼稚園・保育園・幼保園に所属する年中と年長の男女522名と、その保護者と園長とクラス担任である。園児の体力測定は、25m走、テニスボール投げ、捕球、両足連続跳び越し、立ち幅跳び、体支持持続時間の6種目であった。保護者と園長とクラス担任にはアンケート調査を行い、生活習慣や運動頻度、園で一緒に遊ぶ人数などについて調査した。幼稚園と保育園で体力測定値の比較を行った結果、「外遊びをよくする」グループの方の体力が有意に($p < 0.01$)優れた結果となった。一方、一緒に遊ぶ人数の多い方が、体力が有意に($p < 0.01$)優れている結果となった。



連携可能内容 公立・民間の幼稚園や保育園との連携で、幼児の生活習慣や保育内容と体力との関係を調査し、家庭や保育活動の見直しや情報提供ができると考える。また、袋井市、掛川市、磐田市の小学校や放課後児童クラブなどを対象に調査研究を展開したい。さらに中学校部活動の改革でも関係を図りたい。



教授
大相 弘順

OHSUGI Kojune

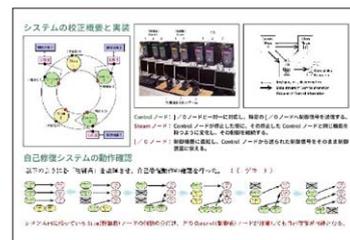
- 学歴 東北大学 理学部 生物学科 卒業(1981)
東北大学大学院 理学研究科 修士課程 修了(1983)
東北大学大学院 理学研究科 博士課程 修了(1986)
- 学位 理学博士(東北大学)
- 略歴 国立精神神経センター神経研究所 研究員(1986)
東北大学 理学部 助手(1987)
カリフォルニア大学 客員研究員(1994)
静岡理工科大学 理工学部 助教授(1999)
静岡理工科大学 総合情報学部 准教授(2008)
静岡理工科大学 情報学部 教授(2012～)
- 学会 日本発生生物学会／日本分子生物学会／日本生化学会／日本動物学会／Society for Developmental Biology USA／日本癌学会
- 専門 発生生物学／遺伝子工学／細胞工学／人工生命
- 研究 動物発生過程の遺伝子発現制御機構の研究／生物発生過程からのアルゴリズムの抽出と工学応用をめざしたモデリング／自己修復する工学システムの構築
- URL <https://researchmap.jp/read0168883>



研究概要

“ロボットやAI”とヒトとの関係は、将来どのようになっていくでしょう？

大相は、元は発生生物学者である。発生では生物ならではの自己組織化や自己修復という柔軟な挙動が見られる。その仕組みを抽出単純化し、工学応用、「生物のように自己修復する」分散制御工学システムを構築した(図)。ここでは生物の幹細胞を基盤に、ボトムアップ的細胞間相互作用が働き、システム挙動中に修復に関与するエージェントを人為的に決めてやることはできないため、ある意味生物的な“気持ち悪い”工学システムとなる。そんな経緯の中で、工学システムに生命的能力をどの程度まで持たせるべきかについて関心を持ち、現在、ヒト型ロボットPepperなども使い、「ロボットの生物的自律能力と、人との関係」等の研究を進めている。また、生命の本質やロボットの生命化の考察を促すため、一般へ情報提供(右QRコード)もしている。今後は、「AIやシンギュラリティ」と、「ヒトや社会」との関係へも研究を展開していきたい。



連携可能内容

将来的な企業活動の展開や、人材育成、雇用の観点から、上記研究テーマに関連してくることがあれば、協力できるかもしれない。

教授
友次 克子

TOMOTSUGU Katsuko

- 学歴 同志社大学文学部 英文学科 卒業(1985)
同志社大学大学院 文学研究科 博士前期課程 修了(1987)
同志社大学大学院 文学研究科 博士後期課程 満期退学(1990)
- 学位 文学修士(同志社大学)
- 略歴 静岡理科大学 理工学部 基礎教育室 講師(1991)
静岡理科大学 理工学部 助教授(2001)
静岡理科大学 総合情報学部 准教授(2008)
静岡理科大学 情報学部 教授(2015～)
- 学会 日本認知言語学会／日本英語学会／表現学会
- 専門 英語学／言語学
- 研究 言語形式と意味の対応／日英語対照研究
- URL <https://researchmap.jp/read0173607>



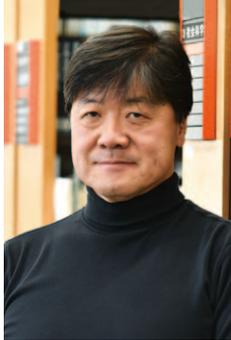
研究概要

コーパスに基づく構文研究

言語学の目標は、母語話者の言語知識を明らかにすることである。言語知識には、母語に含まれる音と含まれない音の区別、語の作り方、文の組み立て方、場面や話し相手に適切な表現の選択なども含まれる。言語知識を直接観察することはできないため、その知識を使って膨大に生み出されている言語現象から仮説を立てて検証する。コーパス(corpus)とは、言語分析に利用できるように収集され、電子化された言語資料である。これまで主にBritish National Corpusから品詞の組合せを駆使して「構文パターン」を抽出し、共起する語との頻度を用いて、構文が表す意味の範囲を調べてきた。説明には、人間の認知能力を基盤にして言語の記述や説明を行う、認知言語学の立場を取っている。ここでの認知能力というのは、知覚、カテゴリー化、注意、推論などを指す。最近では、人手で行ってきた意味分類と、機械学習を用いた分類結果との比較にも関心を持っている。

連携可能内容

辞書や英語・日本語教材の作成、テキストマイニングによるアンケート分析や談話分析など。



教授
林 章浩

HAYASHI Akihiro

- 学歴 近畿大学 理工学部 電子工学科 卒業(1987)
筑波大学大学院 経営システム科学専攻 修士課程 修了(1997)
筑波大学大学院 ビジネス科学研究科 企業科学専攻 博士課程 修了(2010)
南山大学大学院 理工学研究科 ソフトウェア工学専攻 博士課程 修了(2019)
- 学位 MBA(筑波大学)
博士(システムズ・マネジメント)(筑波大学)
博士(ソフトウェア工学)(南山大学)
- 略歴 米国モトローラ社 ページンググループ(1992)
NTT本社、NTT研究所、NTTコミュニケーションズ、NTTデータ(1993)
IBMビジネスコンサルティングサービス、日本IBM(2006)
静岡理工科大学 情報学部 教授(2018～)
- 学会 電子情報通信学会／インフォマティックス学会
- 専門 管理工学／社会工学／ソフトウェア工学
- 研究 ソフトウェア品質管理／プロセス改善／意思決定支援
- URL <https://researchmap.jp/pixysbrain>



研究概要

ベストプラクティスを用いたマネジメント・メソッドの確立

プロセス管理やオペレーションズ・リサーチのノウハウを活用して、効率的・効果的なマネジメント・メソッドを確立する研究を行っている。我々は普段の生活の中で誰もが広い意味でのマネジメントを行っている。身近な例でいえば、カバンに入れる荷物の選別、複数の店に買い物に行くルートを選定、冬場に購入・備蓄すべき灯油の量などもマネジメントとってよい。そのような場合に然るべき方法を用いて計画を立て、計画に従って行動することで効率的・効果的な生活を送ることができる。それがビジネスの場であれば、規模も拡大してスピードも要求される。大きなプロジェクトを率いる場合には複雑性も増大する。失敗が許されないという場面も多い。効率的・効果的なマネジメントを行う恩恵は計り知れない。このような広い意味でのマネジメント・メソッドを体験し習得することで、多様な現場で活躍するプロジェクト・マネージャを育成する。



PDCAによるプロジェクト管理の習得

連携可能内容

私は戦略コンサルティングファームの出身のため、大学の運営や会社の業務など、経験則によるオペレーションの方法を見直し、より科学的な根拠のある方法論へ改善するような場面での連携を望む。あるいは、その前の段階として、大学や会社での運営について、身近な例を用いながら、科学的な管理とはどういうものかという広い知識を習得するための会社内研修の開催などで連携の実績がある。



教授
谷口 ジョイ

TANIGUCHI Joy

- 学歴 横浜国立大学 教育学部 中学校教員養成課程 数学専攻 卒業(1998)
メルボルン大学大学院 留学(ロータリー国際親善奨学生)(2012)
東京大学大学院 総合文化研究科 言語情報科学専攻 博士課程 満期退学(2014)
- 学位 博士(学術)(東京大学)
- 略歴 静岡英和学院大学 人間社会学部 講師(2014)
静岡英和学院大学 人間社会学部 准教授(2017)
静岡理工科大学 情報学部 准教授(2019)
静岡理工科大学 情報学部 教授(2024～)
- 学会 国際応用言語学会(AILA)／社会言語科学会／日本語学会／静岡県民俗学会
- 専門 社会言語学／応用言語学／バイリンガリズム
- 研究 危機言語の記録・保存／方言の変異・変化／第二言語習得／継承語教育
- URL <https://researchmap.jp/joytaniguchi>



研究概要

ことばは社会の中で、どのように変わっていくのか

社会言語学・応用言語学に関連したテーマについて調査研究を行っている。危機言語の記録・保存、方言の変異・変化、海外子女教育、バイリンガリズムなど「ことば」を取り巻く諸問題について、社会との関わりから広く扱っている。

現在は、衰退の危機にある静岡方言の変異・変化を主な研究テーマとしており、データサイエンスの手法を用いて、方言衰退を分かりやすく可視化することを試みている。静岡市北部の井川方言の記録・保存に取り組むとともに、静岡全域で使用される方言(例:「まめったい」「いいにする」など)の意味変化についても調査を行っている。また、複数言語環境にある子どもの言語教育について、海外でフィールド調査を行い、小規模な学習コミュニティの役割や課題について検討している。



静岡市北部・井川での実地調査

連携可能内容

危機言語・方言や、複数の言語・文化環境にある子どもに関する研究課題であれば、連携が可能であると考えます。静岡方言の変異・変化、日本にルーツをもつ海外子女の言語教育、異なる言語や文化的背景をもつ人とのコミュニケーション等についての共同研究が可能です。

教授
本多 明生

HONDA Akio

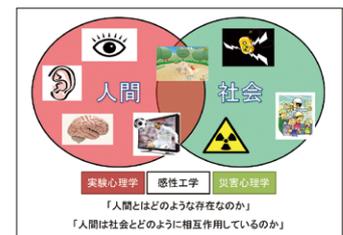
- 学歴 山形大学 人文学部 人間文化学科 卒業(2001)
東北大学大学院 文学研究科 人間科学専攻 博士後期課程 修了(2006)
- 学位 博士(文学)(東北大学)
- 略歴 いわき明星大学 人文学部 心理学科 研究助手(2006)
東北大学 電気通信研究所 研究支援者(2011)
東北福祉大学 総合福祉学部 福祉心理学科 助教(2012)
山梨英和大学 人間文化学部 人間文化学科 准教授(2014)
静岡理工科大学 情報学部 准教授(2018)
静岡理工科大学 情報学部 教授(2025～)
- 学会 日本心理学会／Association for Psychological Science ほか
- 専門 心理学(特に実験心理学、感性工学、災害心理学、性格・社会心理学などの分野)
- 研究 多感覚情報処理(視覚や聴覚、体性感覚などの複数の感覚情報がどのように統合されるのか、など)／
感性情報処理(映像コンテンツの臨場感や迫真性はどうすれば高めることができるのか、など)／
防災・防犯意識(災害などの非常事態に強い人にはどのような特徴があるのか、など)
- URL <https://researchmap.jp/akio.honda>



研究概要

現代社会における多様な人間行動の解明

心理学が専門。「人間とはどのような存在か」「人間は現代社会とどのように相互作用しているのか」について心理学的手法を用いて幅広く研究している。例えば、視覚や聴覚、体性感覚などの複数の感覚情報がどのように統合されるのか、映像コンテンツの臨場感や迫真性はどうすれば高めることができるのか、災害などの非常事態に強い人にはどのような特徴があるのか、などを研究してきた。最近では、社会問題に関する実態調査や心理学に関する優れた洋書を翻訳出版する社会啓発活動にも取り組んでいる。研究を通じて社会に潤いと安らぎをもたらすことを目標にしている。



専門分野の相互関係

連携可能内容

人間行動に関する事柄であれば連携可能。例えば、商品やサービスの感性評価は、全国規模の社会調査を複数回実施した経験がある。その研究成果は、NHK、読売新聞、毎日新聞、教育新聞、日経テクノロジー、静岡新聞、山梨日日新聞等のメディアに取り上げられた。県や自治体、教育委員会、企業等と連携した経験がある。気軽にご相談を。



教授
兼子 一
KANEKO Hajime

- 学歴 山口大学 人文学部 人文学科 卒業(1991)
大阪市立大学大学院 文学研究科 社会学専攻 前期博士課程 修了(1995)
大阪市立大学大学院 文学研究科 社会学専攻 後期博士課程 単位取得満期退学(2001)
- 学位 修士(文学)(大阪市立大学)
- 略歴 関西大学 総合情報学部 非常勤講師(2001)
大阪大学 大学院人間科学研究科 研究支援員(2001)
関西学院大学 21世紀COEプログラム リサーチアシスタント(2005)
近畿福祉大学 社会福祉学部 講師(2006)
甲南大学 人間科学研究所 客員特別研究員(2006～)
神戸医療福祉大学 社会福祉学部 准教授(2019)
神戸医療未来大学 人間社会学部 准教授(2020)
静岡理工科大学 情報学部 教授(2025～)
- 学会 日本社会学会／日本社会学理論学会／日本社会分析学会／日本芸術療法学会／アートミーツケア学会 ほか
- 専門 社会学(社会学理論)／社会調査論／エスノメソドロジー／芸術社会学／宗教社会学／エンパワメント科学
- 研究 エスノメソドロジー(成員カテゴリー化実践の分析)／アーツセラピーを用いたエンパワメント活動の調査／アートエンパワメント活動と限界芸術の理論／エンパワメント型アーツセラピスト支援ツールの開発
- URL <https://researchmap.jp/kaneko68>



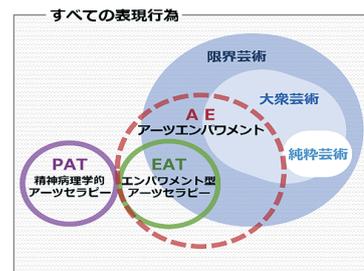
研究概要

社会調査と社会分析で生まれる社会学理論で人びとのウェルビーイング向上をめざす!

アンケートやインタビューなどを行い、調査データを既存の社会学理論と結びつけて分析し、さらにそこから新しい理論(もののとらえ方や概念)やツールを生み出して人びとのウェルビーイングを高めたい。

その1つが町なかのアーツセラピー研究である。2012年よりチームで全国調査を展開している。アーツセラピーは狭義では精神医療における治療法の一つだが、広義では現代人のウェルビーイング向上を目指すエンパワメント活動である。ただ、ニーズがありながらも周知されていない。そのため周知を目指して「エンパワメント型アーツセラピー(EAT)」「アーツエンパワメント(AE)」という呼称を考案した。

現在、実践者と連携し、課題の解決に向けたアクション・リサーチを進めている。エンパワメント活動の質を上げるための「自己評価ツール」の開発中である。また、1956年発表された限界芸術論と接続して現代アートの動態について新たな理論を模索している。



アーツセラピーの分類図

連携可能内容

- 提供したいエンパワメントサービス内容と適合するエンパワメント型アーツセラピストおよびアーティストの紹介
 - 事例)多文化共生NPO「いちご」に静岡県立大学(高畑研究室)と協力して適合アーツセラピストを斡旋
- 自治体の地域おこし調査／高校「総合的探究の時間」等で行う社会調査への適切な企画・実施・分析のアドバイス

准教授
松田 崇

MATSUDA Takashi

- 学歴 武蔵野美術大学 短期大学部 美術科 卒業(1999)
東亜大学 通信制大学院 総合学術研究科 デザイン専攻(2021)
- 学位 修士(芸術)(東亜大学)
- 略歴 東映アニメーション研究所 非常勤講師(1999)
武蔵野美術大学 特別講師(1999)
武蔵野美術大学 非常勤講師(2001～)
創造学園大学 創造芸術学部 芸術学科 非常勤講師(2006)
白梅学園大学 子ども学部 子ども学科 非常勤講師(2012)
静岡理科大学 総合情報学部 講師(2016)
静岡理科大学 情報学部 講師(2017)
静岡理科大学 情報学部 准教授(2021～)
- 学会 日本デザイン学会／芸術工学会／芸術科学会
- 専門 コミュニケーションデザイン
- 研究 コミュニケーションデザインの実践
- URL <https://researchmap.jp/mazda>



研究概要

コミュニケーションデザインの実践

私たちの社会生活には、様々な「情報のコミュニケーション」があります。本研究室では、そのコミュニケーションの「カタチ」をデザインする研究を行っています。その中でも視覚を利用したコミュニケーションを中心に研究を行なっています。例えば、ヴィジュアルデザインやシンボルマーク・ピクトグラムのデザインなどです。右記の写真は、ピクトグラムデザイン(写真上)とバスのラッピングデザイン(写真下)の作例です。

連携可能内容

コミュニケーションデザイン全般について連携可能。





准教授
伊藤 明倫

ITO Akihito

- 学歴 名古屋芸術大学 美術学部 デザイン科 造形実験コース 卒業(1999)
名古屋市立大学大学院 芸術工学研究科 博士前期課程 修了(2011)
- 学位 修士(芸術工学)(名古屋市立大学)
- 略歴 コンピュータ学園HAL 非常勤講師(2002~2003)
大同大学 非常勤講師(2003~2021)
中京大学 非常勤講師(2004~2021)
名古屋デザイナー学院 非常勤講師(2006~2009)
名古屋芸術大学 非常勤講師(2007~2022)
名古屋学芸大学短期大学部 非常勤講師(2008~2014)
名古屋学芸大学 非常勤講師(2014~2021)
愛知学泉短期大学 非常勤講師(2014~2017)
名古屋市立大学 研究員(2015~2020)
金城学院大学 非常勤講師(2018~2021)
名古屋文理大学 非常勤講師(2020~2021)
静岡理工科大学 情報学部 准教授(2022~)
- 学会 日本映像学会 中部支部幹事
- 専門 メディアアート／メディアデザイン／映像インスタレーション
- 研究 メディアアート・メディアデザインと映像表現の制作と研究
- URL <https://researchmap.jp/itoakihito>



研究概要

メディアアート・メディアデザインと映像表現の制作と研究

映像や写真、サウンド等を用いたインスタレーションの制作・研究発表と、コラボレーション・共同制作という形で、デザインプロジェクトや、インタラクティブな作品制作・研究などを行っている。映像インスタレーション制作では、映像や視覚メディアの基礎的な構造(fpsやトランジションなど)に着目し「ムーヴィングイメージの持つ構造と視知覚との関係性」について考察している。共同制作では、映像とサウンドがデジタルデバイスによってインタラクティブに変化する、ライブイベントやインスタレーション作品を発表している。近年は、生体情報に着目し、同期現象を用いた体験型作品の制作を通じて、情動(無意識、意識に上がる前の感覚)や、新しいコミュニケーションの形を模索する展開も進めている。



連携可能内容

メディアアート表現やメディアデザインに関する連携。



准教授
渡邊 言也
WATANABE Noriya

- 学歴 学習院大学 文学部 心理学科 卒業(2007)
筑波大学 人間総合科学研究科 感性認知脳科学専攻 一貫性博士課程 修士取得退学(2009)
玉川大学 工学研究科 脳情報専攻 博士課程後期 単位取得退学(2012)
- 学位 博士(工学)(玉川大学)
修士(神経科学)(筑波大学)
- 略歴 日本学術振興会 特別研究員(DC2) 玉川大学(2010~2012)
独立行政法人情報通信研究機構 有期研究員(2012~2014)
日本学術振興会 特別研究員(PD) 名古屋大学(2014~2017)
日本学術振興会 海外特別研究員 米国Rutgers大学 (2017~2019)
高知工科大学 総合研究所 助教(2019~2022)
静岡理工科大学 情報学部 准教授(2023~)
- 学会 日本神経科学学会/日本心理学会/北米神経科学学会(SfN)
- 専門 認知神経科学/生理心理学
- 研究 感情とストレスの神経基盤の解明
- URL <https://researchmap.jp/noriya>



研究概要

感情やストレス反応を支える脳と身体メカニズムの理解

どんなに理性的で客観的に行動しようとも、我々の行動は気づかぬうちに感情に影響されています。感情による色づけは、時には判断を早めたり、学習効果を高めたりしますが、別の時には記憶を歪めたり、能力を低下させることもあるでしょう。本研究室では、人間の行動の背後にある感情やストレスの影響を、脳波計やMRIによる脳機能計測や、眼球運動・心拍・呼吸・唾液成分などの生理計測、さらに計算理論を用いて研究しています。

連携可能内容

- 感情やストレスのレベルを客観的に評価するための手法・機器の開発
- ストレス対応能力(レジリエンス・ハーディネスなど)の個人差を評価する新たな手法・機器開発



准教授
白田 泰如
 USUDA Yasuyuki

- 学歴 京都大学 文学部 卒業(2010)
 京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士課程 修了(2012)
 京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程 指導認定退学(2016)
- 学位 博士(人間・環境学)(京都大学)
- 略歴 日本学術振興会 特別研究員(DC2)(2014)
 国立国語研究所 音声言語研究領域 プロジェクト非常勤研究員(2016)
 静岡理科大学 情報学部 講師(2023)
 静岡理科大学 情報学部 准教授(2025～)
- 学会 社会言語科学会／日本語用論学会／日本認知科学会／International Pragmatics Association
- 専門 相互行為分析／語用論／コーパス言語学
- 研究 人間同士の会話はどのように成り立っているのか
- URL https://researchmap.jp/y_usuda



研究概要

対面的相互行為の諸相の解明、および相互行為を通じた社会および認知の研究

私たちは普段、言葉や身振りなどを使ってごく普通に会話をしています。しかしながら、そのやりとりを詳細に観察すると、ごく微細な表出と理解の繰り返しによって成り立っていることが見えてきます。本研究室では、ビデオデータや会話コーパスを利用した会話の詳細な観察に基づいて会話の仕組みの研究をしています。また、会話を介して行われるさまざまな社会的活動における会話の研究も行います。



講師
津田 裕之

TSUDA Hiroyuki

- 学歴 京都大学工学部工業化学科 卒業(2007)
京都大学大学院人間・環境学研究科 修士課程 修了(2013)
京都大学大学院人間・環境学研究科 博士課程 修了(2019)
- 学位 博士(人間・環境学)(京都大学)
- 略歴 産業技術総合研究所 特別研究員(2019)
慶應義塾大学 特任助教(2020)
同志社大学心理学部 助教(2022)
静岡理工科大学 情報学部 講師(2025～)
- 学会 日本心理学会、日本認知心理学会、日本基礎心理学会、日本環境心理学会
- 専門 認知心理学／実験心理学／認知科学／環境心理学
- 研究 人間の知覚・記憶・感性／空間や環境が人間の心理や行動に与える影響／美術の心理学
- URL <https://researchmap.jp/tsudahiroyuki>



研究概要

人間の心理と行動の性質を解明し、より良い環境デザインを提案する

人間の知覚や記憶、そして思考には、さまざまな特徴やバイアスがある。これらを解明することで、人間にとってわかりやすい道具や魅力的なコンテンツ開発に必要な指針を得ることができる。本研究室は行動実験やウェブ調査、画像解析やバーチャルリアリティなど、さまざまな技術を組み合わせることで、人間の認知機能の研究や、感性や印象の研究、そして芸術に関する研究などを行ってきた。また、最近では環境や空間がそこにいる人間の心理や行動に与える効果についての研究をおこなっている。こうした研究を通じて、人間にとってより良い環境をデザインする方法を明らかにできればと考えている。

- 人間の認知機能に関する心理学研究(知覚、注意、記憶など)
- 感性や芸術の心理学および認知科学
- 空間デザインが人間の行動パターンや思考に与える影響の研究

連携可能内容

- 製品やサービスのユーザビリティや印象の評価
- わかりやすさ、記憶しやすさ、印象深さなどの向上
- イラストやゲームなどのメディア表現の分析
- 空間デザインが人間の心理や行動に与える影響の分析